

學讀本

ホ 2  
5717





明本 2  
號 5717  
卷

# 文部省編纂

五万部限

# 小學讀本 卷一

明治七年六月 神奈川縣翻刻



小學讀本卷之一

第一回

凡世界に、住居する  
人に、五種あり、○亞  
細亞人種、○歐羅巴  
人種、○メレイ人種  
○亞米利加人種、○  
亞弗利加人種なり、  
○日本人は、亞細亞  
人種の中あり、



神奈川縣  
翻刻



誓古

幼雅

師強

出精

一事

人の誓古に種々ありといへども、先づ書を讀み  
 字を寫し、物を數ふること、學ぶを第一の務め  
 とし、○幼雅のとき、必す學校に行きて誓古を  
 学ぶべし、○學校に到りても、何事も、師匠の教へ  
 に、順ひて、只管勉強をべし、  
 何事を學ぶにも、出精するを第一とし、○出精せ  
 された、多くの事を、覺ゆることなし、  
 一事にてても、覺えたるとき、能く氣を附けて、こ  
 れを、忘るべからず、  
 初めより多く覺えんと、思ふとき、却て忘るゝ

日習自然

日用

筆道

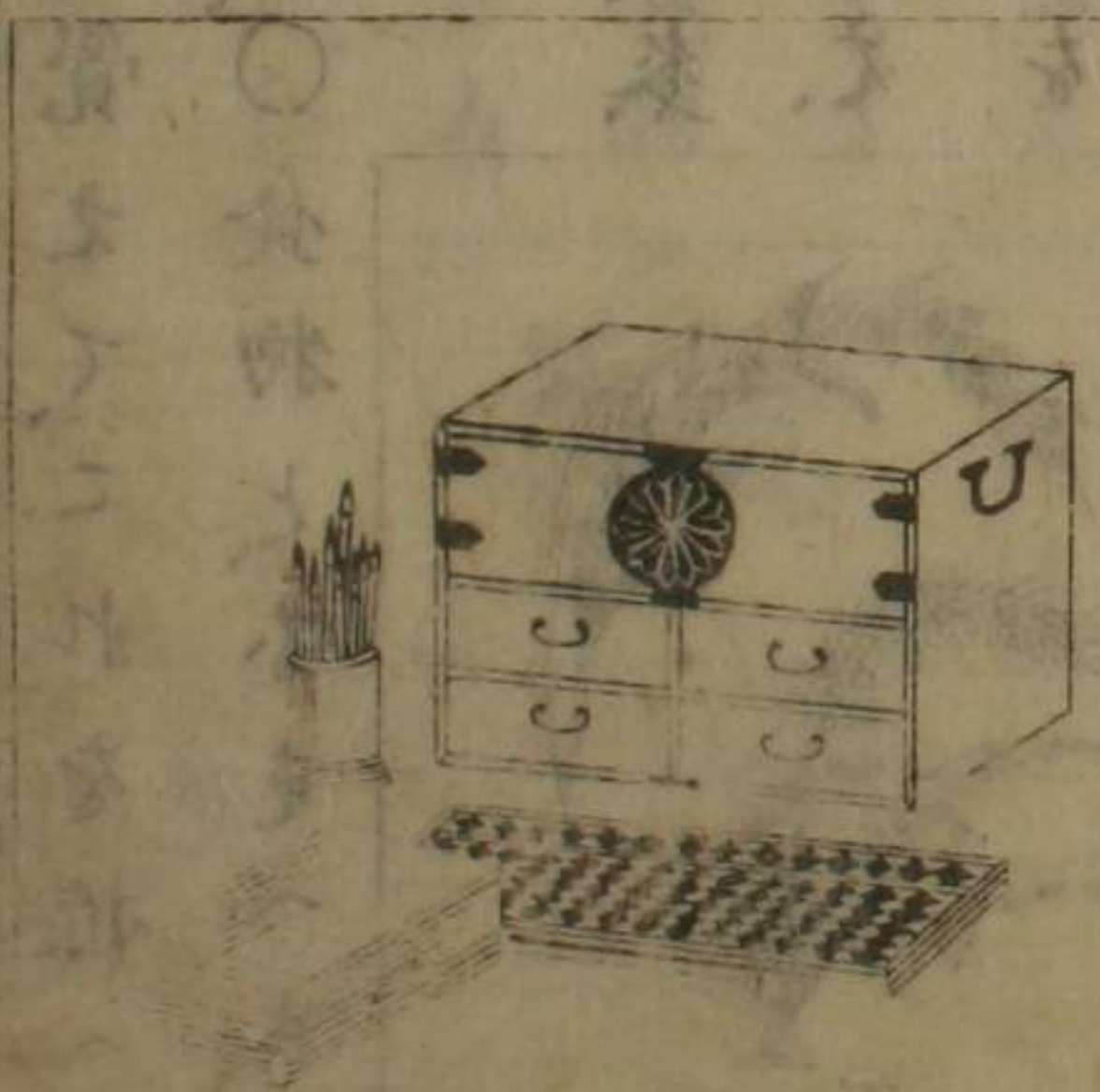
算盤

文庫

箱物

箆筒

こと多し、故に少く充覺え、一事をも忘れぬ曰々  
 忘りぬ、習ふとき、自然は、多くの事を、覺ゆる  
 幼雅のとき、先づ日用の道具の名を覺え、其用  
 の方を知るべし、○筆は、字  
 を寫し、又、画を寫す、道具  
 あり、○算盤は、物を數ふ  
 道具あり、○文庫は、書物を  
 入る、箱あり、○箆筒は、衣  
 裳などを、入る、器あり





平生食物

又平生食するもの、名を覚えて、これを指へ食物と、ふは仕方を、知るべし。○食物と、ふまべきもの、に、種々あり、

種穀物、米粟、豆麥、稷黍、田畑

第一、穀物なり。○穀物も、米、麥、豆、粟、稷、黍の類なり。○此品も、皆田、又、畑に、作りて、其實を、取り、炊きて、食物とふし、或は、焼きて食物とふしなり。

燒獸肉、鳥肉、魚肉

第二、肉類なり。○肉類も、獸肉、鳥肉、魚肉の類なり。○此品も、焼きて、食物とふし、又、煮て、食物とふ



菓物、葡萄、梅、橙、柿、蜜柑、鹽漬

と、小のふり、  
第三、菓物なり。○菓物も、葡萄、橙、梨、梅、桃、柿、蜜柑の類なり。この品も、多く生にて、食物とふし。○柿、また、鹽漬とふして、食物とふまあり。

葉根、實

第四、野菜の類なり。○此品も、畑に作るものと、野に生むるものあり。○多くは、煮て、食物とふし、又、鹽漬と、ふまあり。○總て、野菜も、葉と根を、食物とふす、又、實を食物とふ





七、農、工、商、別々、幼年、學一般

小學校

世間、賢、愚

人の務めも種々にて、士、農、工、商とも、皆別々の學文あり、されども、幼年のとき、習ふべき學文を、みふ同トことなり、これを、一般の學文といふ、○この學文を、習とどれた、何れの業をも學ぶこと、能むぞ、

故に、人々、六七歳に、至れた、皆小學校に入りて、一般の學文を、習ふべし、○小學校を、士、農、工、商とも、皆習ふべき、學文を、教ふる所なり、凡世間の、人々に、賢きものと、愚うなるものあれども、皆幼稚のときより、學校に入りて、能く勉強

讀

個様

遊歩、時間

遊歩、身、心、樂、慰、動、場

を、此の事を、覚えざるものなり、○人々、一たび讀みて、事を覺ゆれを、曰く、これを百たび、讀むべし、○人々、十たび習ふて、事を知れを、曰く、これを千たび習ふべし、○個様も、怠りなく、勉強を、必す、事を覺ゆるものなり、○愚うなるものにて、多く、事を、知りたれを、賢き人と、ふるものなり、學校にありて、誓古まるものなり、○必す、遊歩の、時間あり、○此時間にて、遊歩場に由て、思ひのまに、遊歩して、身を動かし、心を慰むべし、○勉強を、とあると、あれを、遊歩するも、樂みなり、

小學讀本卷之一

而能學校



遊歩を、楽しみと思へば、誓古の時間と、怠らむ、勉強  
 せべし、

男遊戯危輪

遊歩場に出で、男兒の遊  
 び戯るゝことも、種々ふれ  
 ども、總て、危き遊びを、ふせ  
 べからむ。○輪を廻らし、又  
 も、風を揚げ、又、球を投ぐ  
 るふどを、宜しとも、○相集  
 りて、遊ぶときも、自合ハ樂  
 み、朋友をも、樂ましむべし、



風球相集

自分朋友

女子異駈走

女子の遊びも男兒と異りて  
 駈け走るなどの、遊びを、ふせ  
 べからむ。○朋友と連き合ふ  
 て、遊ぶときも、睦しう親みて、  
 何事も、物知らずに、ふまべし、



我等汝

我等も、河の中に、行くと欲す。○我等の、此河の  
 中に入るを見よ、○私も、汝と共に、此中へ入らんと  
 欲す。○汝も、好むことあらむ、此中へ行くべし  
 ○我等も、皆此中へ、入ることを得るや、○汝も、今

第二回



破帽懸糸登

新彼 空中

彼れを、新き帽を持てり、○彼れは、古き帽を破れ



此小兒は、新き風を持てり、○彼れは、風を持ちて、走るを見よ、○彼れは、風を空中に飛をせんと思へり、○汝は、風の揚るを見んと欲すや、○風は、空中に登りたると、心を用ふるべし、○糸は、水に懸ることあり、

動

今、遠、陸、乾、渉

深水

深水に入らんと欲すや、○汝は、出づることを得べきや、○今汝は、濕ふたり、○遠く、渉るべからず、○陸へ上りて、乾すべし、○今汝は、この小舟に、乗らんと欲すや、○汝は、この小舟の、動くを見よ、○小舟に乗りて、走るべからず、





新喜

小濡頭被私彼

着猫寝床

たりそれゆゑに喜んで新  
 きものを持てり。○新き帽  
 にて能く心を用ゐるべし  
 又それを濡すべからず。○  
 一人の小兒を頭に帽を被  
 ぶれり。○私の帽を古きゆ  
 ゑに、彼人をして私に新き帽を  
 持てと云ふ。○此小兒は長  
 きマントルを着たり。

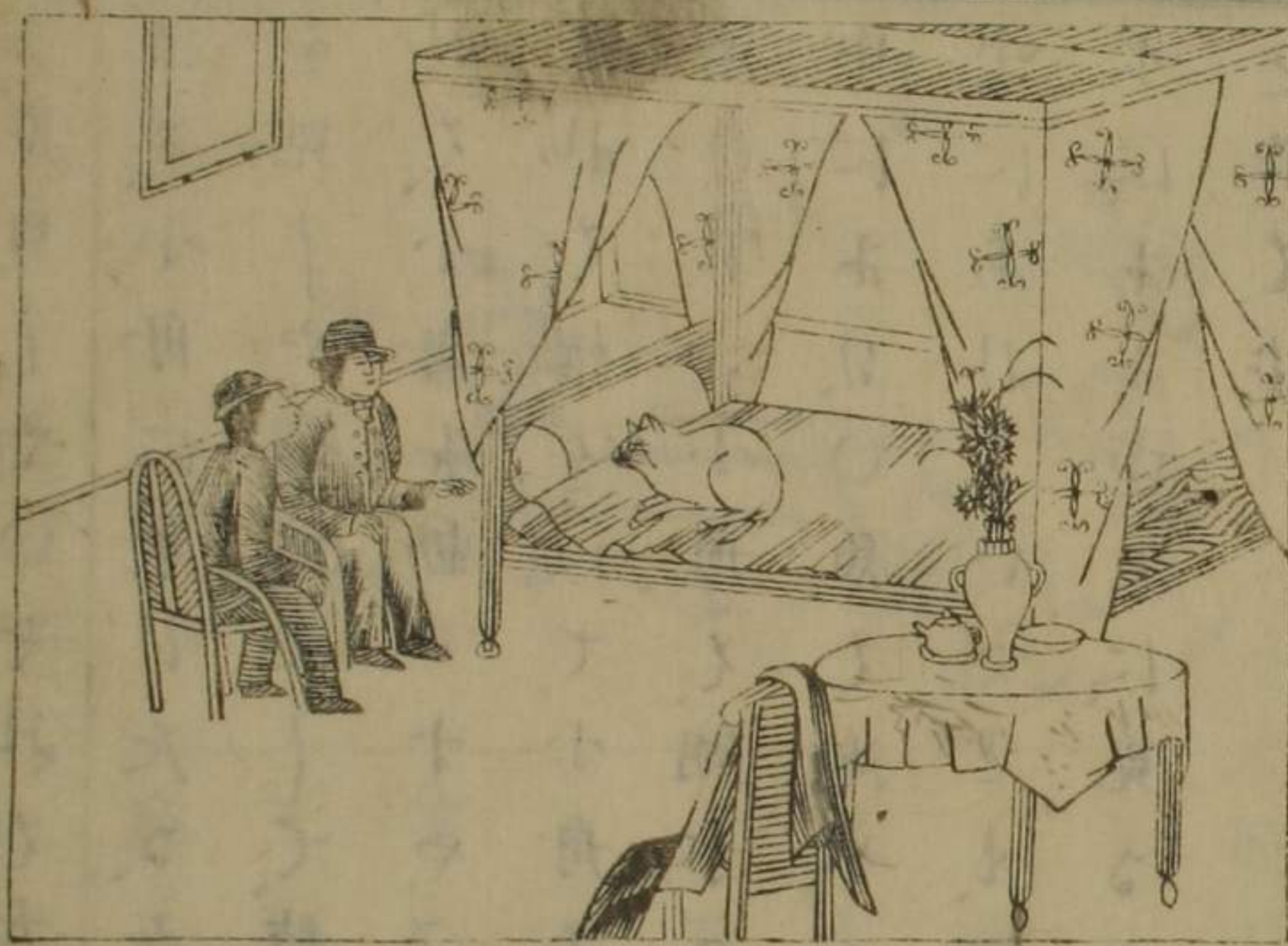
此猫を見し。○寝床の上に居れり。○これとよき



追退手載

此餘齋  
留所  
部屋

許鼠



猫にもあらず寝床の上  
 に来れり。○汝は猫を追  
 ひ退くるや。○私の手を  
 載するときは、猫は私を  
 噛むべし。○猫も餘所へ  
 行くべきや。又も此所に  
 留るべきや。○猫も此部  
 屋の中に留るといへど  
 も、寝床の上に来るを許  
 さず。○汝は猫が鼠を捕



善終熱長觸  
日日

蹴球堅柔 人當傷



に、長く遊ばべからず、強き熱さに觸るべから

彼れを、球を蹴て遊べり、汝を、  
それを見よ、や、○私に、棒を以  
て、球を打つを見たり、其球を、  
堅きものなるや、○これ、柔  
くなる、球なるゆゑ、人に當る  
とも、傷けり、ことなり、○小兒  
等を、球遊びを好み、○それ  
も、遊ばに、善き、は、な、り、  
終日遊ばべからず、又、熱き、

漕湖魚  
水

如何動權  
何

るを見よ、や、○それ、大なる鼠にあらざ  
汝を、小舟に乗りたる、人  
を見よ、や、如何にして、彼  
れを、小舟を動かすや、○  
彼れを、權を以て、小舟を  
漕けり、○小舟も、湖水の  
中にあり、○魚も、湖水の  
中にありといへども、深  
水に、あるゆゑ、見るこ  
と能はず

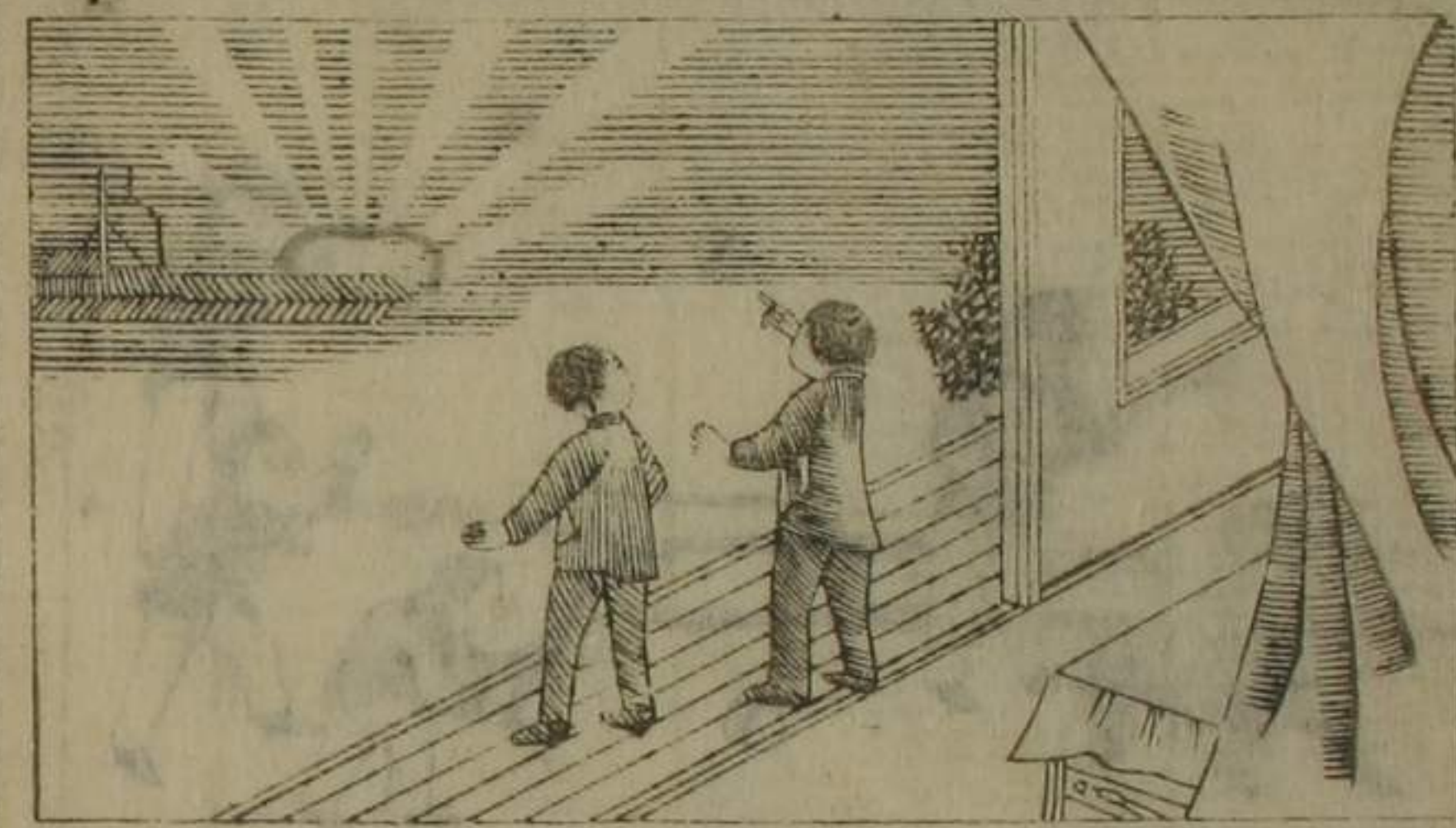


るを見よ、や、○それ、大なる鼠にあらざ



身害大登起時  
陽出刻

赤色  
早



す、然るとききた、身を害ふものなり。

大陽の、登りたるとききた、我等の  
 起き出づべき時刻の、來りりと  
 知るべし。○大陽の登りたると  
 きに、猶寢所に、臥すべからず、  
 我等を、大陽を見るとも、日の出  
 を、見ることを得ず、○汝を、大陽  
 の、赤きときを見しや、大陽の、赤  
 色なるとききた、多く早すること  
 あり、

樹  
海棠  
蕾

花開  
奇麗

これ、何の樹なりや、○そ  
 れも、海棠の樹なり、○汝を  
 海棠の中に、蕾のあるを見  
 しや、○此、樹も赤き蕾にて  
 満てたり、○私にて、蕾を取  
 り得べきや、○それを、今  
 取るべからず、○今暫く過  
 ぐると、其蕾を皆花を開き、  
 奇麗なる、赤き海棠となる、  
 其とき、汝も、海棠を取らべし、





彼飼暴 馴鳥 馴鳥  
 以前歌好 前  
 又跳 飛  
 息枝



を飼ふを見しや、○此鳥を馴れたりや、又を暴る  
 ことありや、○此鳥今を馴れたりといへども、  
 以前よく暴れたり、○汝  
 え、鳥の歌を聞くことを好  
 むや、又好まざるや、○私を  
 歌を聞くことを好み、又尚  
 鳥を見ることを好み、○  
 鳥を跳るや、又を飛ぶや、○  
 これを木の上へ飛ひ上り  
 又木の枝に息へり、○此鳥

彼鳥 籠女  
 否  
 食速汝食養 老餌 雞 牝



第三回

彼女を鳥を捕へて、鳥籠に入れたり、○汝を、彼鳥

彼人、牝雞を養ふ爲に行き  
 たり、○汝を、牝雞の食餌する  
 を見しや、○汝を、老いたる牝  
 雞の、速々に食するを見しや、  
 ○それと、與ふるほど、食する  
 や、○否、それ程多くて、食し得  
 ず、○牝雞を、何を食するや、○  
 彼れを、穀物を食せり、



再歸小惡且遠  
兒

善小兒

彼小女  
信切

籠より出つることを好むや、○若籠より出づるとき、再び歸り來るや、又を飛ぶよるや

我を惡しき小兒を好まず、

且これを遠ざけんとす、○

惡しき小兒たりとも、好む

ことありや、○善うらざる

小兒にても傷くることな

し然れとも、これと共に、行くことを好まず、

彼れを、彼小女の爲に、信切なりや、○然り、彼れを、

信切にして、彼小女の、倒れさる爲に、手を取て導



路否彼  
迷子

森通  
中恐

彼任導  
母全  
家安



けり○彼等二人を、路に迷

ふべきや、○否彼子た、能く

路を知るゆゑに、彼等二人

を、路に迷ふことなり、○彼

等た森の中を、通るを恐る

や、○否、恐る、ことなり、

○彼れ之母が、彼れに任

たるゆゑに、彼子小女を

導きて、家に在ると、同一く安全なり、○若家に歸

らんと思ふとき、歸ることを得べし、

上  
百  
色  
集  
交



杖老人

路傍  
息候

難何歩屈體老年白顔  
起故行 年老鬚

汝を、老人の杖を携ふるを  
見しや、○何に由て、彼れを  
杖を用ふるや○彼老人を  
路傍の石の上に息ひ、其手  
を杖の上に置きり、○彼れ  
の顔と、白鬚あるに由て、彼  
れの年老いたるを知り、又、  
老年に由て、體の屈みたる  
を知れり、○老人を、杖を倚て歩行す杖なくして  
何故に、歩行し難きや、○彼れを起つことを得べ



杖

善顔



きや、又、歩行することを、得べきや、○彼れを起  
つことを得、又、歩行することを、得るといへども、  
速うに、走ること能はず、  
茲に、四人以上の人あり、○汝  
を此人の、年老いたるを知る  
や、○此人を、皆手に杖を持ち  
たる、老人と、向ふく、年老いた  
り、○汝を此人を、善き人と思  
ふや、○此人の顔を、善人と思  
べし、○此人を、白き鬚あるを

善人



箇様

喇叭

常

及に、老人あるべし、○我等も、箇様ある顔を好めり、



彼等の持ちたる、箇の名も如何なるや、○此も、喇叭あり、○彼等も、老人あるや、○否、彼等も、老人にあらば、○皆小兒あるや、○彼れも、小兒にあらば、少年あり、○彼等常に立ちて、坐ることなきや、○彼等を皆手に、帽を持てり、

幅紗

否、物

説得

墨壺、筆、見

汝も、此人の、幅紗の中に、何を持つと思ふや、○それ、木なりや、○否、巻物なり、○何の巻物なるや、○汝も、其巻物なることを説き得るや、○汝も、此人の、目を見たりや、○彼れ、何の目も、巻物を見たり、○其外、汝も、何を見しや、○我も、墨壺と筆を見たり、○此人も、筆を操りて、巻物を読むこと、本を讀むが如し、



小書讀本卷之二  
十三  
行名無交





色々の教へを説き示すことあり

汝え此小女子を見しや○何ゆゑに彼れを其手を揚げしや○彼れを鳥を入れたる籠を持ちたり然れとも彼れを心を用ゐること宜しからず

良き老人を我が好みに従ひて我に聽けしむるや○彼れを小兒を愛するや○然れ彼れを善き小兒を愛すも更に惡しき小兒を愛すことなし○善き小兒を此れ

して鳥を養ふこと能えざるゆゑに鳥を彼れが持つや否や速々に逃げ去りたり○鳥が逃げ去りたる時森の中に飛び入りたり○此とき彼れを手を揚ぐるとも何の用にも立ちがたし○彼鳥を飛び去りたり汝再び捕ふこと能えず○彼れを鳥籠に心を用ゐることなく又鳥を養ふこと能えざるゆゑに我れ鳥の逃げ







たゞを真へり○鳥え自由なることを好めり  
誰う鳥の聲を聴くことを  
好まざるや○汝え亦鳥を  
見ること好まざるや○  
鳥え木に在ることを好み  
て、巢を造り兒を養育す○  
鶯鶯え小鳥なり棘の間に  
巢を造りり○かゝ鳥え頭  
に總あり

第四回



此女子を愛らしき人形と輪を持てり○汝え輪  
と人形を好むや○汝え人形を大切に弄ぶや○  
汝え人形を舞し得るや○此  
女子を輪を廻らす爲に、棒を  
持てり○輪を速くに廻らす  
に速くに走らざるを得ず

此女を小兒を愛すとおもふや○又小兒を此女  
を愛するや○汝え此兒の美しき顔を見たりや  
○此女を甚だ此小兒を愛す○又小兒を此女を  
愛することと思ふ○我え此美しき顔をつきて



指示 飽 娘 傷



むるやと問ふに小兒え自  
ら好む人形を指示せり  
○此小兒え人形をかひ弄  
ひて飽くときを愉を弄ふ  
ことを好むべし其外店  
に列ねたる品え皆小兒の  
好むものなれとも此小兒  
えよき娘なれを只人形の  
みを愛し能く心を用ゐる  
傷むることなす

其外店に列ねたる品え皆小兒の好むものなれとも此小兒えよき娘なれを只人形の

買 小間物屋 此店 凍暖 裸袒 長巻 誤

説らん○彼れえ長き髪あ  
り○其巻縮する矩合を見  
よ○彼れの足を裸體なれ  
とも此所を暖氣なるゆゑ  
に凍ゆることなす○汝も  
此兒の名を知るや○否我  
え其名を知らず  
母が小兒を携へて人形を買ふ爲に小間物屋に  
行きたり○汝も此店に多くの小間物のあるを  
見たりや○母が小兒に向ふて何れの人形を求





象終古  
水日

圓眼

馬走  
早

靜



象を終日古木の枝にをりて、  
夜に入ると、始て飛び去る。此  
を大なる鳥にて大なる圓き眼  
あり。

馬に乗りたる人あり。○如何  
に、彼れを早く走るや。○汝を  
馬に乗ることを好むや。○私  
も馬に乗ることを好めり。さ  
れども、彼れの如く、早く走る  
ことを好まず、馬を靜々に歩



鞭 後向 茲小 船 二本 大船 帆 渡海 浪風 吹立

ますことを好めり。○何故に、此馬を早く走るや。  
○彼人々、馬を鞭うつゆゑに、早く走れり。○此人  
の後へ向きたるを見よ。○彼れも、水を見るなり。  
茲に小船と大船あり、小船に  
も、二本檣あり、大船にも、三水  
の檣あり、汝も、檣を見よ。○  
汝も、檣の上なる、帆を見よ。○  
○汝も、小船に乗りて、海を渡  
るを好むや、大船にて、渡るを、  
好むや。○風吹きて、浪の立つ



小舟

大船



渡海

陸

蒸氣船  
帆舞船

暴風  
海上

浮

有様

難儀

軍艦  
商船

ときに、我を船に乗りて、渡海するを好まず。○我  
を、風の吹くときに、陸にあるを好む。○これ、  
蒸氣船なるや、○否、蒸氣船にあらず、帆舞船なり。

見よ、茲に、暴風の中に、海上に  
浮む船あり。○櫓も折れ、帆も  
破れたり。○恐ろしき、有様な  
りや。○此船も、帆舞船なるへ  
し。○蒸氣船ならむ、斯く難  
儀することあらず。○これ、  
軍艦なりや。○否、商船なり。



蓮葉

肥  
上着



此小兒も幼年なるゆゑ、水  
中に深く入ること能はず。○  
此小兒も何をなさんと欲す  
るや。○これ、小き蓮の葉と  
大なる葉を取らんと欲す。○  
も、陸より遠く離れて行  
るとき、水を又深くなるべし。

一人の男も、左の手に、帽と杖を持り。○此  
圓き顔にして、肥えたる腮なり。又長き髪あり。  
彼れも長き上着を着たり。○此上着、煖う



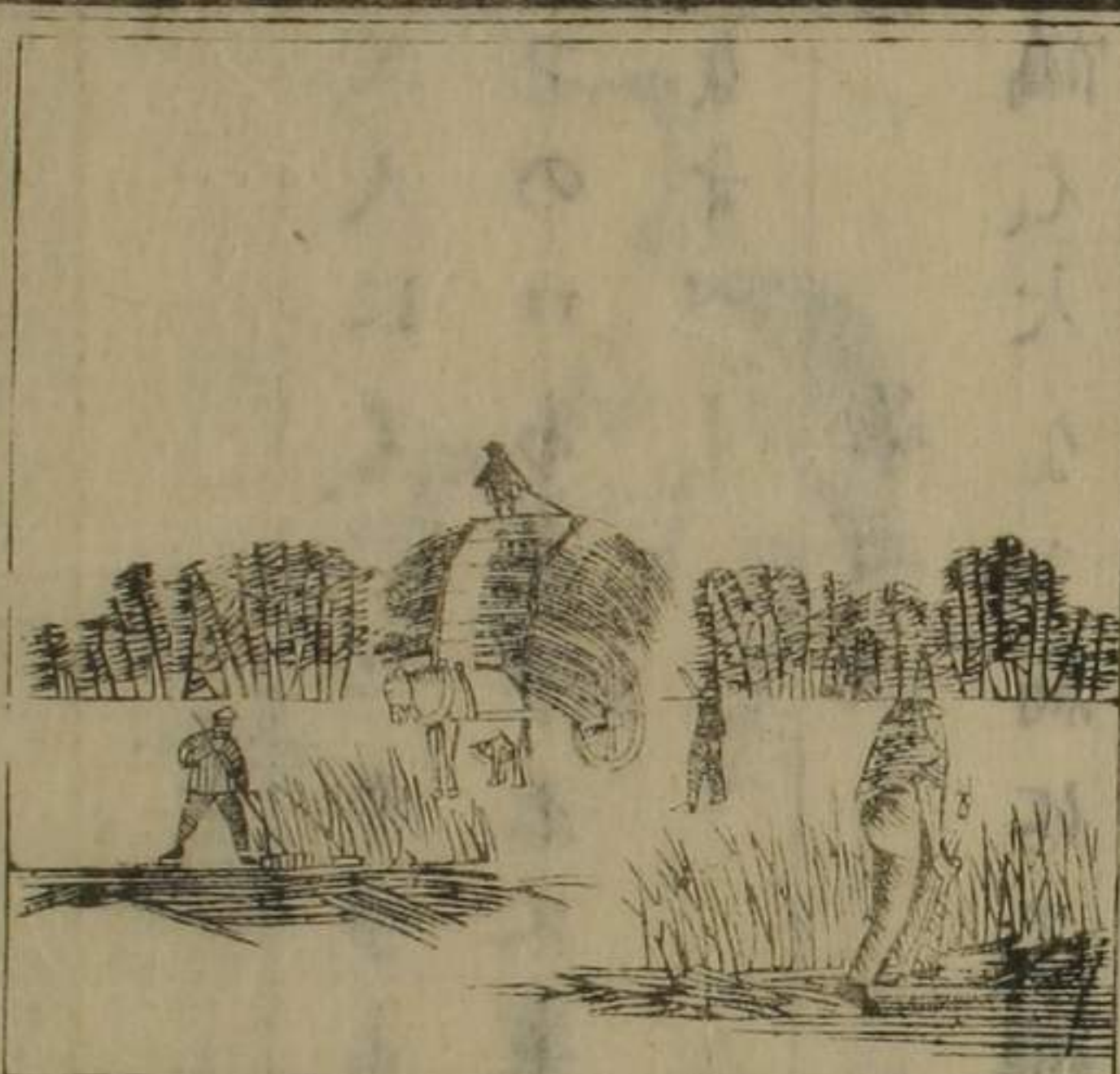
運 車 積 草 聞 部 業 現 肘

へ、トの帽を被ふりたる人む、  
 上着を着すトて肘を現むせ  
 り、これをも業をなすゆゑなり、  
 の彼れも我部屋へ、人の來る  
 を喜び、又人の話トを聞くこ  
 とを好めり、○一人の少年も  
 只彼等の話トを聞き居たり  
 人ガ、草を積み舉げたり、此草の、枯れたるときこ  
 れを、枯草と云ふ、○枯草を車に載せ、これを馬に  
 引りせて小屋へ運び入る、○草の枯れたるとき



小 兩 再 牛  
 屋 遇 滯 馬

耳、口、香、聲、食、言  
 目、鼻、嗅、聞、味、見



も急ぎて、小屋へ運び入る  
 べし、然らざるとき雨に遇  
 へた、再び滯るゝものなり、  
 ○此枯草を、牛馬の食とな  
 すなり、○馬も、枯草と、麥を  
 食すれども、又甚だ、麥を好  
 みて食す、

人に耳目、口、鼻あり、○鼻を香を嗅ぎ、耳を聲を聞  
 き、口を食を味ひ、又物を言ひ、目も物を見るもの  
 なり、○人も只一つの鼻あり、一つの口あり、され



言多見  
分聞

業多  
話少

大鶴  
茶雛  
鳥色



又人にて、二つの手と二つの足とあり、  
一つの口あり、ゆゑに業を多くなして話  
を少くなすべし。

第四回

鶴を大なる鳥にて、雛のときを茶色なれども、生

生雪白  
長頸長  
色長

高飛  
教師  
數多  
書物  
讀事



長くたるときを雪の如く  
白き色となるなり。○この  
鳥は長き頸に、長き脛あ  
り。○此鳥の卵は、大にして、  
白きものなり。○汝常に、鶴  
を見ることありや。○吾常  
に見ること少し。○これ

水中に入り、又高く飛ぶことあり、  
教師は、學校へ來り、茲に、數多の小兒と、小女子  
あり。○此等々皆書物を讀み、事を學べり。○學校



石盤

語綴

日地樹池氷滑  
和七上

にえ机と石盤と筆と書  
物あり○汝え、學校へ行  
くことを好むや○汝え  
書物を讀み又語を綴る  
ことを能くするや○私  
え書物を讀むことを好  
めども未だ能く讀むこ  
とを得ず

今日え寒き日和なり○雪が地上にも樹にも池  
にも積氷り○小兒え氷の上を滑ることを好



傍、雞、卵、巢



めり○此遊びえ甚た危  
きものゆゑ能く心を用  
ふるべし○もし氷より  
落つることあれを身を  
傷ふべし○善き小兒え  
此危き遊びを好むこと  
なし

此小兒え卵の傍へ手を遣れり巢の中に六つ  
の卵あり○これを鶏の卵なり○鶏え巢の傍に  
在りて飛び去らず、これを卵を取らるゝことを

小學讀本卷之一

五 市範學校



憂

青模  
薄樣  
黒

菊愛  
桔梗

憂ふるゆゑなり。○雞を、部屋の中に、巢を造れども、又樹の枝に巢を造る鳥と、草の中に、巢を造る鳥あり。○卵にも、白きものと、青きものと、薄黒き模様のものあり、



菊と、桔梗の花あり。○汝も、菊を愛するや。○小兒も、桔梗の花を折りて、手に持ち、娘も大なる菊の花を、手に持



黄色

紺色

數多

樹登糊穀  
類

てり。○菊の花も、多く黄色なり。○桔梗の花も、多く紺色なり。

數多の鼠あり、これに日中に、出づることなり。○日の暮るゝとき、直に出でず、夜中に至りて、各々遊び出づ。○此等の、遊び出づるとき、諸所を歩き、又棚に登り、糊又穀類を食す。○然れども、猫の聲を聞くとき、一時に静まりて、噪ぐことなく、驚きて、怒り穴

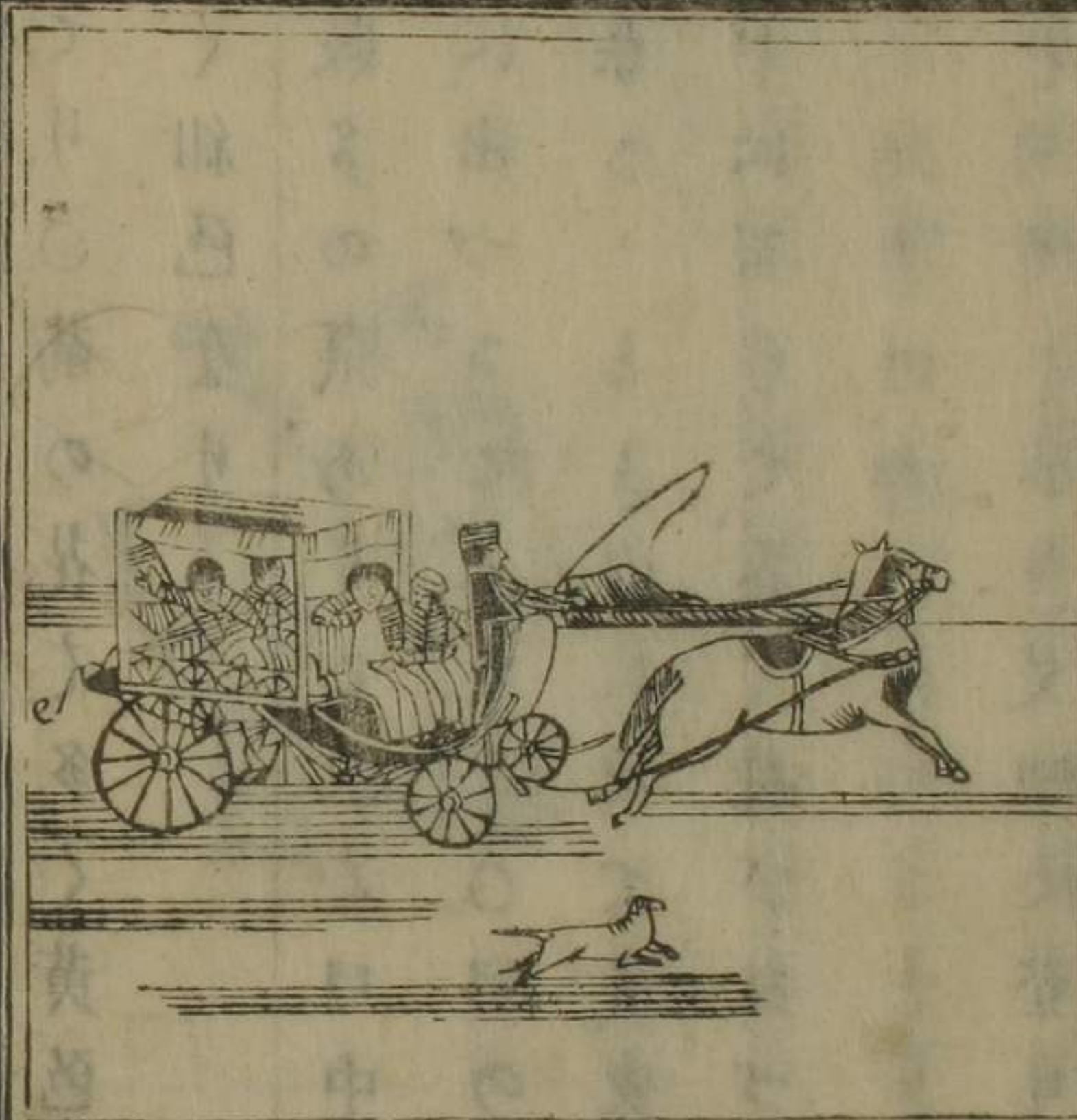




馬車 載

皆我學校

の中へ逃げ入るなり、○猫の居るとき鼠を遊び  
出づることなりト



茲に、馬車ありて、數多  
の小兒と、女子を載せ  
たり、○汝を此小兒と、  
女子を、知れりや、○然  
り、私を、是等を知れり  
○これ皆我學校の  
人なり、○彼れの犬を  
馬と一同に、走れり、○

脱 響箱

彼等を、汝を見たりや、○彼れを、私を見るときは  
其帽を脱げり、我も彼れを見るときは、必ず帽を  
脱がさることなりト

此箱のうち、響きあり、○汝  
えこれを、何の響きと思ふや、  
○此箱の中にあるを、鼠又を  
猫なるべし、汝を、何と思ふや、  
○此響き、甚だ小なるゆゑに、  
私を、小き鼠なりと思ふ、猫に  
もあらず、大なる鼠にもあら





神明  
話明

畏敬  
我身  
幸願  
善道  
時候



茲に、四人の小兒あり、其中二人を坐し、他の二人を立り  
○一人の老人ありて、此小兒等に、神明の話しを聞かせり  
○又老人の云ふに、總て小兒を、神明を畏敬して、我身の幸を、願ふとをらむ、善き心を持ち、善き道を行ふべし。○小兒のときを、春の時候の如

智恵

種時

生長

壯年

働年

冬時

遊戯

正に我心に、智恵の種を蒔くときなり、智恵の種を蒔くとき、學文することなり。○生長して、壯年に至れむ、人間の働くべき時と思ふべし。○老年に至れむ、冬の時候の如し、茲に、手に杖を携へたる、老人あり、是も不自由に、目も暗くをれり、されども此老人も、一時を小兒に遊ばせ、其時を、今の汝等の如く、早く走り、又遊ばせられたり





足、震、肩、倚、春

規、大、年、横、離、水、輪、目、切、經、木

○今を、足も震へるゆゑに、小兒の肩に倚りて、此  
水が爲に、導りたり。○見よ此老人を、冬の時  
候の、至れるなり。○汝等も長く、春の時候に  
あるべし。○汝ら我ら必む、此老人の如くなるべし。

茲に、規の大木あり。○汝を、此木の年を経たる、數  
を知るや、○今此木を、横に切り離して、木目の輪  
を、數へ見るべし。○水目の輪を、一年に、一つ充増  
すものなるを、輪の數に  
て、此木の年を経たる數  
を知るべし。○此木を、今



其、備、其、初、種

大になりて、枝を空に至るといへとも、其初めを  
僅り一つの種より生きたるなり、其種を至て小  
きものにて、汝の手に、持ち得べきものなり。

天津、再、昨、無、大、今、夜、先、息、多、過、天、導、給、道、免、謝、災、母、明、朝、奉、難、夜、拜、神



天津神、再拜、昨夜も、無難に過ぎて、大奉なり、今朝  
夜明けて、光りを下し給ふによ  
り、父母の息災なる顔を見、こ  
とを得たり、多謝。○私を導き給  
へ奉を興へ給へも、  
を免し給へ。○私の死すとき  
を天道へ、導き給へ拜、  
天津神と、  
天津神と、  
中

天津神、再拜、昨夜も、無難に過ぎて、大奉なり、今朝



主神、高皇產靈神、神皇產靈神、天照大御神を云ふ

第六回

濱邊、網引

良、悪、皆一同

捕

此人等え、小舟に乘りて濱邊に入り、網を以て魚を捕りたり。○濱邊に網を引くときえ、此に罹りたる魚を大なるも、小なるも又、良きも、悪きも、皆一同に捕ふることを得るなり。○汝も茲に、三人の男あるを見しや、○又彼等も、數多



海水

二、四、投、大、瓶、入、魚

の魚を捕りたるを見しや、○海水の中にも、多分の魚あれども、中に良きものと、悪きものとあり。○一人の男も、悪き魚を二匹、海中へ投げ入りたり。○又一人を屈みて、大なる魚を瓶に入る所なり。○汝も、二つの瓶あるを見たりや。○此瓶に、魚を入れて満ちたるときえ、我が家に持ち帰りなり。

此處、花園、美、花、園、設

此處も如何なる場所と思ふや、○此處も、花園なり。○茲に數多の、美しき花あり。○此愛らしき小兒と娘との、遊び場所に設けたりと思ふや。○汝



鍬、瓜、籠、猥、菓、物、積、棚、葡、萄



姦に葡萄の棚あり。○一人の男を葡萄を積み入

る此小兒等を喜んで遊ぶと思ふや。○左の手に鍬を持ち右の手に、帽を持ちたる小兒あり。○小兒の後に杖を持ちたる娘あるを見よ。○一人の娘も瓜を入れたる籠を持てり。○汝も花園に行きて遊ぶとき、猥りに花を折り、菓物を取るべうらた。

腰掛、膝上、房、此男、花折



此、籠を持てり。○又腰を掛けたる一人の女あり其膝の上に小兒を抱けり。○小兒の兄を立ちて、葡萄の房を取れり。



此男も花園を作る人なり。傍らに小兒あり。○此人も小兒等に向て猥りに菓物を取るべうらた。又花を折るべうらすと云り。○又私も菓物を取り又花を

小兒等

三十五 花折



取與

白瓜

梨子

蔓

其影  
大陽

取りて與ふべし、故に小兒を自ら取るべからず  
といふ。○も、此人の教へに従えずして、自ら花  
を折りたりか、再び花園に來るを得ざるべし。  
茲に、菓物を積み入れたる籠  
あり。○此菓物を、白瓜と「葡萄  
と、梨子なり。○籠の外に、掛り  
たるは、葡萄の蔓なり。○籠の  
左に、其影あり、然れを汝も、大  
陽のある方を、知りたるや。○  
大陽も、籠の右にあるべし。



今日  
晴、天  
氣、露、葉、農、野、畑、艾、擔、夫、耕



日の出を見よ。○今日を、晴れたる天氣なり。○鳥  
が、鳴きて、水より、水に飛び移り。○草を青々と  
して、葉に露を待てり。○數  
多の農夫を、野に出で、或  
は畑を耕し、或は草を焚れ  
り。○一人を、鋤を擔ひて立  
てり、其傍に犬あり。○これ  
を、彼れの畜へる犬なり。○  
晴れたる天氣に、必ず野  
に出て、働くものを知る

農夫の勤



日中 照處 煖樹 較涼 臥 凌 水飲 橋河 晝飯

今日日中になりたり。○大陽の照らす處を甚だ煖なり。然れども樹の蔭を較涼しきゆゑに臥したる牛と立ちたる牛あり。○又一匹の牛を煖うさを凌ぐ爲に河に行きて水を飲まんとす。○河の上に橋あり。○人を皆日中になりたれを晝飯を食する爲に家に入りたり。



日暮 歸來 牛庭 乳絞 十分 乳汁 甚忙



日暮になりたり。○人を野より歸り來り、牛を庭にあり。○一人の女を庭に出で、牛の乳を絞り、手桶に十分、乳汁を得たり。○此女子は、新しき乳汁を飲むことを好み。○汝を戸の傍に犬のあゑを見たりや。○此人々を甚だ忙し人と思ふや。○日暮になりたれを今日、変りたる草を積み入る、爲に忙しきなり。

牛乳絞



鷹

高山  
岩間

平野

夜中

鷹を、尤つよき鳥にして、他の鳥の、恐るゝものなり、○鷹を高く空中に飛び行く○高山の岩の間又を茂りたる、大木の枝に、巢を作らるものなり、○されども、食物を得る爲に平野に出で來ることあり○今雀を、捕り來りて、雛を養ふを見よ、



天津神も常に我を守り給へるゆゑに私を、縛りにて、暗き夜中に、歩行するも、恐るゝことなり、○

獨  
暗  
眠

見  
給

忽  
蒙  
罰



眠りたるときも、神を守り給へるを以て、暗き所に、獨り眠るも、恐れず、○暗き所にて、神を、能く見給へるを以て、人の、知らざる所にて、も、愚くまことをなせを、忽ち、罰を蒙むるものなり、○人の、知らざることにて、神を、能く知り給ふて、善きものにて、幸を興へ、愚

第七回

八景續入卷之一

辛二行危甚矣



數得  
林檎

汝、物を數へ得るや、〇も一父が汝に林檎を十  
一與へ母が汝に林檎を五つ、  
與ふるときは汝、幾つの林  
檎を得るや、〇十六の林檎あ  
り、〇汝等、物を數ふること  
を學ぶべし、〇大なる數と小  
き數を知るべし、〇汝、石盤  
又紙に、數字を書き得るや、  
〇も一數字を書き得ぬならを、務めて之を書く  
ことを學ぶべし、〇物の數を知らざるを愚なる



石盤  
數字

加  
上

人なり



机の上に十一の梨あり、その中  
三つを、母が持ち去りたり、然る  
とき、机の上に残りたる梨子  
を、幾つとなるや、〇残りたる梨  
子を八つなり、

文字  
書得  
贈書狀

汝等、文字を書き得るや、  
〇文字を書き得ざるときは、人  
に書狀を贈ること能はず、  
〇このゆゑに、汝等、文字を書





くことを學ぶべし

智惠



汝等も、文字を、讀み得るや、○  
文字を讀むことを、知らざれば、  
人より、贈りたる書狀を讀む  
むこと能えず、○書物を讀む  
こと能えざれば、事を知ること  
となし、○見よ、事を知らざる  
人、智惠ありとも、物の用に  
立ち難し、○ゆゑに、文字を讀  
むことを、知らざれば、愚なる

馬、獸、入、陸、荷、每  
誠、用、類、地、物、日

人となるなり、○汝等も務めて、文字を讀むこと  
を學ぶべし、

馬を誠に入用なる獸類にて、  
陸地にて、荷物を運ぶに、每  
日入用なり、○馬は、大なる獸  
類にて、長き顔あり、○立髪あ  
り、○背の上に、荷を負ひて、遠  
方に、送るものと、人を載せて  
走るものと、車を引くものあり、  
牛も、馬と同どく、入用なる獸類にして、能く車を



小學讀本卷之一

三十一 市名 紅交



牛肉

牝牛

衣織物  
黒羅紗  
羽織

引き又た荷を負ひて、遠  
方に送るものなり。○さ  
れども牛を人を求せて  
走ること能く、○牛の  
肉を食物となりて能く  
養ひをなす。又牝牛より  
乳汁を取ることを得る  
なり。



汝の着たる衣裳も、何と云ふ織物なるや。○黒き  
絹の衣裳なり。○私の羽織も、黒羅紗なり。○汝は

水綿

毛織物

紺色  
紺色



絹と水綿と、羅紗の中何  
れが第一に暖うなりと  
思ふや。○羅紗も、毛織物  
なれど、第一に暖うなり  
其次に、暖うなるもの  
水綿なり。絹も又其次な  
り。○絹も柔うなれども  
身を暖むること少し

茲に、白き単衣と、紺色の単衣あり。○汝は何れを  
第一に、暖うなりと思ふや。○白き色も太陽の熱



夏、涼  
冬、寒

白衣

道理

二枚

を引くこと少きゆゑに夏  
も涼しくけれども、冬も寒し  
○紺色を大陽の熱を能く  
通はすゆゑに、冬も暖うな  
れども、夏も熱し○見よ人  
々、夏も多く白衣を着、冬も  
多く、紺色の衣裳を着るこ  
とを、この道理あるゆゑな  
り



茲に、二枚の圖あり、皆人の、働く所を画々けり○

農、農  
現

稲、麦



初の圖を、野に出で、  
種を蒔く所なり○こ  
の人も、携へたる籠に  
種を入れたり、この人  
の、肘も脛も現を水た  
りて水を熱きとき、日  
中に出で、働くゆゑ  
なり、

次の圖を、稲を蒔りて我家に、持ち歸る様なり、○  
又稲を打ちて、米を取る所を見るべし、此人々



汗、流、地、落、農夫

苦勞

蠶育

糸、取、舉、朝、早、起

の汗を流して地に落つるを見よ。○農夫は個様に働らざれば穀物を得ることなし。○汝等常に穀物を食するときは農夫の苦勞を念ふべし。



桑葉、取、摘、男

蠶、飼



あり、桑を取り葉を摘む所なり。○此刀を野に出で、耕す人と同じく、肘も屈も現え、汗を流して働けり。○個様に數多の男女が苦勞して、拵へされ、糸もなく絹もなし。○汝等、暖くなる衣を着たるときは必ず蠶を飼ふ人々の苦勞を忘

小書讀本卷之一

三五 下巻 蠶

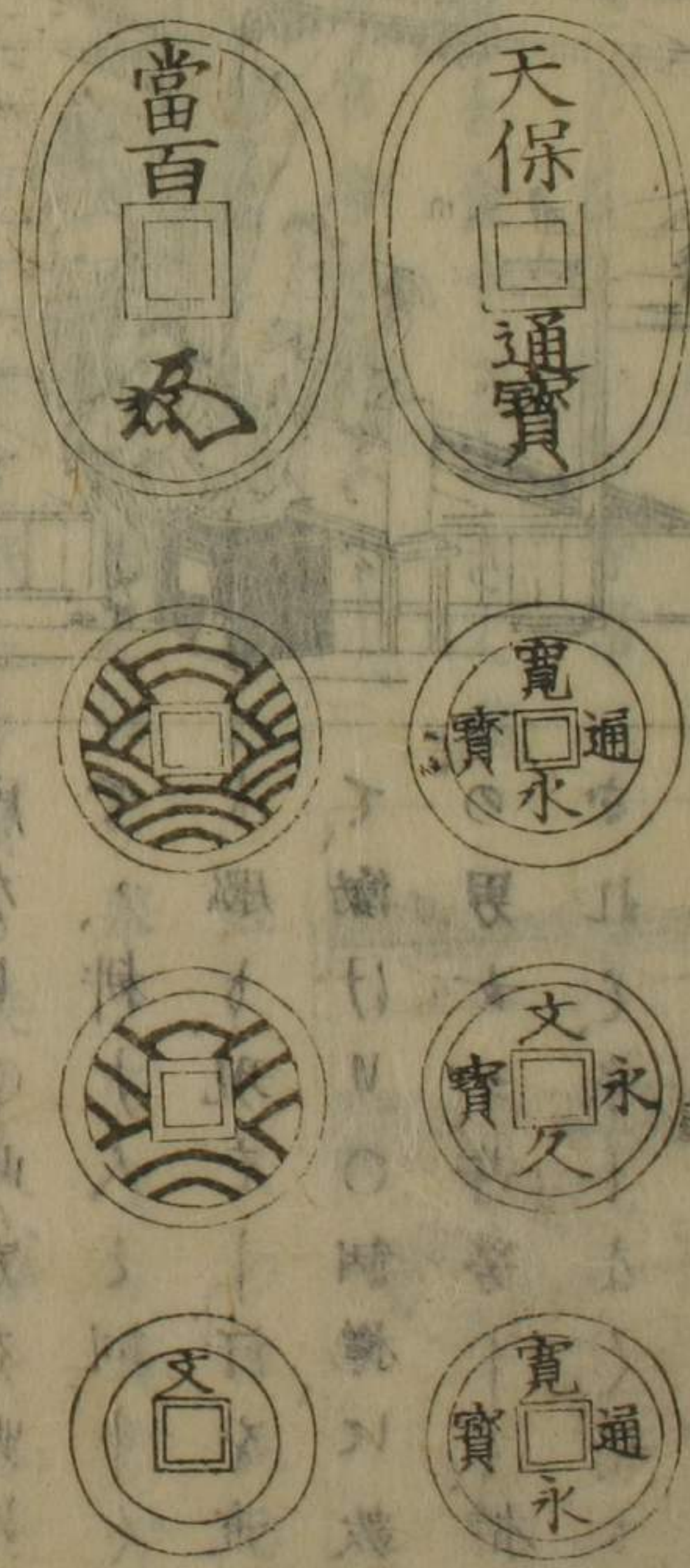


貨幣

四品  
錢  
幕府

るべからず

茲に、種々の貨幣あり、



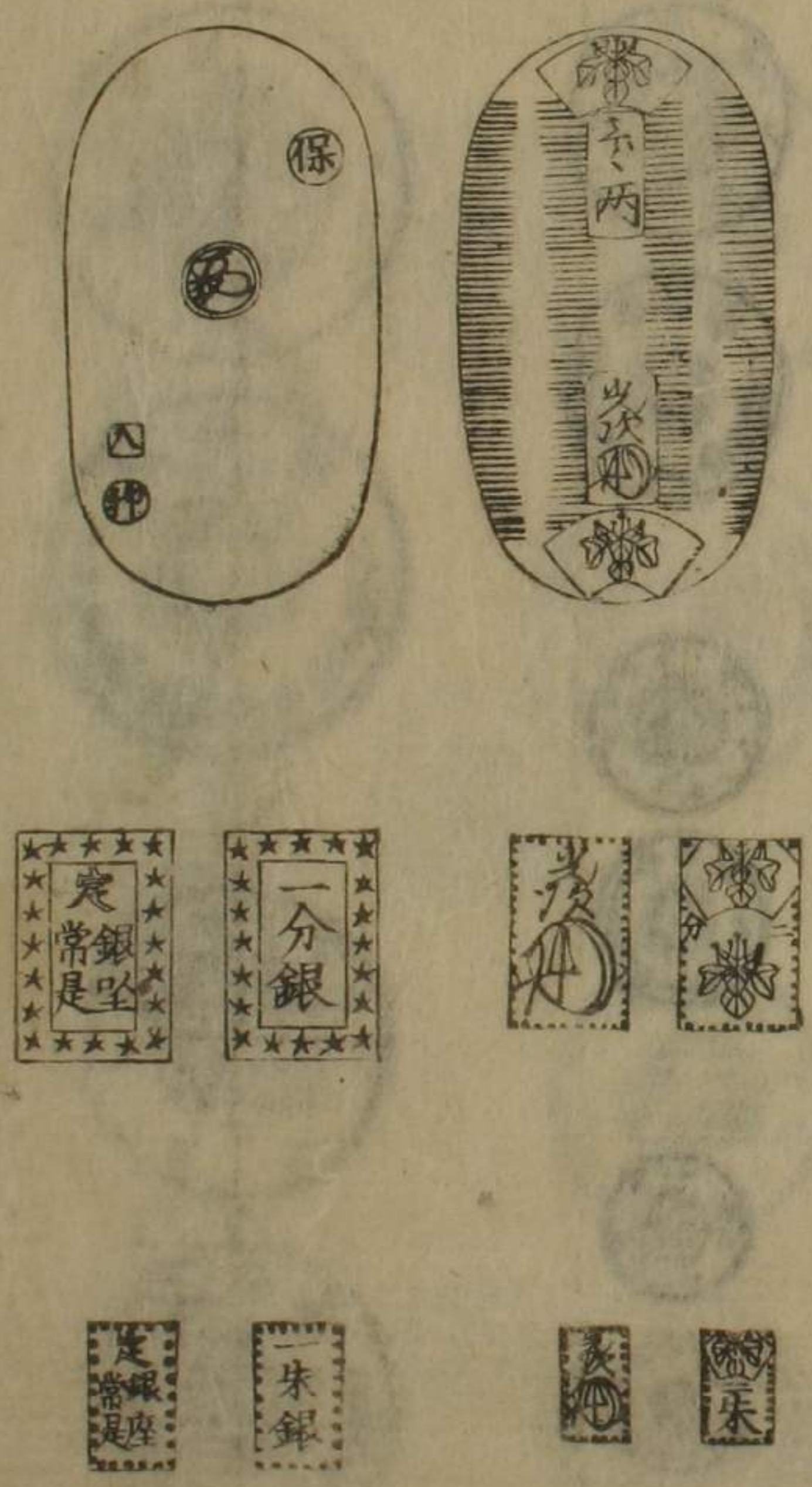
右四品の貨幣を錢といふ、徳川幕府のときより

通用

金

今日までも通用するものなり

此五品の貨幣を金といふ、徳川幕府たりるとき



一、幕府大元

三六

一、幕府大元



の通用金なり



銀貨幣

右五品の貨幣を銀貨幣と云ふ

右五品の貨幣を銀貨幣と云ふ



右五品の貨幣を、金貨幣と云ふ



銅政發

府行般

右三品を銅貨幣と云ふ、  
此三種の貨幣を政府の發行にて、當時一般通用



圓朱分

の品きり

錢一文を一毛といひ、十毛を一厘といひ、十厘を  
一錢といひ、百錢を一圓といふ、ゆゑに十二錢半  
を、金二朱に當り、二十五錢を、一分に當り、五十錢  
を、二分に當るなり

小學讀本卷之一終

天三用範學







谷市

跡藏老青